
納豆ジェネレーション

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

納豆ジエネレーション

【Nコード】

N5710H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

納豆が食卓に出る、それがどうしても我慢できない父親、しかし家族はその納豆を美味いといい。関西では最近まで納豆を食べる人は人間扱いされませんでした。

第一章

納豆ジエネレーション

今日の晩飯のメニューを見る。

キスの天麩羅にホウレン草のおひたし、それに豆腐と若布の味噌汁であった。それと梅干がある。白い御飯は当然としてそこにあるのだった。

「よし」

家長である浜野健吾はそのメニューを見てまずは満足そうに頷く。

「善き哉善き哉」

「何でそんなに嬉しいんや」

「いや、実は今日な」

向かい側に座る女房の千賀子に対してここで少しむっとした顔になって語る。

「昼飯に吉野家に行ったんや」

「それで牛丼食べたんやね？」

「そう、ところがその横でや」

顔をさらに顰めさせてそのうえで言葉を続ける。

「隣の学生かな。若い子が何食ってたと思っ？」

「何食べてたの？」

「納豆食べてたんや」

このうえなく顰めた顔になってしまっていた。

「納豆。あんなもん横で食ってたんや」

「ふっん、納豆かいな」

「ふっんちゃうわ」

ここで女房の言葉に口を尖らせるのだった。

「あんなん食ってたんやぞ」

「あんなんかいな」

「そっや、あんなんや」

さらに口を尖らせての言葉だった。

「納豆なんてな。あんなもん食い物とちゃうやろが」

「またそんなん言うてからに」

「牛丼はええ」

まずはそれはいいとしたのだった。

「あれはな、アメリカやつたらヘルシーメニューなんや」

「あんな油っこいもんがかいな」

「アメリカやつたらあれでさっぱりしとるらしいわ」

「そのこと自体が信じられへんけれどな」

女房にしてはそちらの方がであった。

「あれがヘルシーかいな」

「牛丼食うてる横でや。納豆食うなんてな」

「で、どないしたんや？」

「怒鳴りつけたるところやがぐつとこらえたつた」

とりあえずその程度の常識はあるようである。

「それでも。もうむかついてなあ」

「そんなに納豆が嫌いなんかいな」

「納豆は食い物やない」

また言うのだった。

「あんなもんはな。悪魔の食い物や」

「悪魔なあ」

「悪魔やなかったらゲテモノや。食えたものやない」

「今時そんなに納豆が嫌いな人も珍しいな」

「わし等の代にはそうやつたんや」

なお彼は今四十歳である。中年である。

「その時にはな。まだ納豆なんてこつちじゃ滅多に食う奴はおらん
かった」

「私食うてたで」

女房はしれつとした顔で彼に告げる。

「広島やつたら食うてたで」

「関西じゃ見たこともなかったわ」
言葉からわかる通り彼は生粋の関西人である。
「あんなもんな。食うなんてな」
「けれど最近結構多いやん」
「世の中が狂ってるんや」
彼の主観でしかないがそれでも言う。
「あんなもん。何で食えるんや」
「身体にええで」
「腐つとるやろが」
関西人独特の発言である。
「わしの時のクラスの奴が一人好きやった」
「偉い人がおったんやな」
「全員で顔顰めて人間かって言うたつたわ」
しかしその偉人に対する扱いはこんな有様だったのであった。
「あんなもん食うてな。あんなまずいもんをな」
「まずいつて食べたことないやん」
「実はそうであった。健吾は納豆を一粒も食べたことがないのだ。」
「それも全然。ないやろ？」
「納豆を食わんでも生きていける」
これが健吾の主張であった。
「わしは豆腐を食う。それだけで充分や」
「ほな朝の納豆は？」
「関東の奴等はそやから性根が腐ってるんや」
「これまたとんでもない暴論である。」
「朝からあんなもん食うてな」
「あんなもんかいな」
「とにかくや。わしは納豆は食わん」
「頑迷なまでに言い切る。」
「わしはな。絶対に食わんからな」
「ほな納豆あんたはいらんねんな」

「見たくもないわ」

あくまで納豆を嫌うあまりここで千賀子の言葉の意味を理解することを忘れていた。

「わしの目の前には絶対に出すんやないぞ」

「まあ最近スーパーでも納豆は普通に売ってるけれどな。安いし」

「安くても高くても納豆を食うようになったら世の中おしまいや」

「納豆は北斗神拳かいな」

これまた古典的な言葉である。彼等の世代の定番の言葉だ。

第二章

「世の中が終わりとかそんなん」

「まあ豆腐とか枝豆で充分やな」

大豆自体は好きなのだった。

「ほな。そういうことだな」

「はいはい」

そんな話をして夕食を食べるのだった。子供の淳はまだ部活である。サッカーが強い高校なのでかなり遅くまで練習しているのである。

「それならね」

「納豆がなかったらええ」

こんな話をしていた。とにかく彼は納豆が嫌いだった。しかし次の日。その日はたまたま健吾の仕事が遅く淳と一緒に食卓だった。そこにあつたのは。

「それだけはあかんやろが！」

「どないしたんや父ちゃん」

息子の淳は父親がいきなり食卓において叫びだしたのでまずは茫然とした。

「いきなり。酒飲み過ぎたんか？」

「アホ、まだ飲んでないわ」

それはすぐに否定する健吾だった。とりあえずその細い目と細長い顔はまだ白い。一応ビールは側にあるが。なお息子の淳はあまり細長い顔ではなく長髪で細い目に厚めの唇をしている。髪は黒いが結構童顔で可愛いと言った方がいいような顔をしている少年だった。

「ビールは食後や」

「そやつたら何でも酔ってるんや？」

「酔ってないわ」

それはあくまで否定する父だった。

「酔ってはない。安心せい」

「そうなんか」

「そうや。わしが何で大声出したのかは」

「んっ！？ 阪神えらいボロ負けやな」

ふとテーブルの横に置かれていているテレビでの野球中継を見ればそうだった。

「ヤクルトに。何や、十点差かいな」

「それは腹立つが巨人が相手やなかったらまあええ」

彼はそれはまずはいいとしたりのだった。

「大体それやったら御前も怒ってるやろが」

「まあそやけどな。巨人応援することなんかできるかい」

「その巨人と同じもんや」

父はまた言ってきた。

「御前が今食ってるもんはな」

「んっ！？ これかいな」

「そや、それや」

顔を思いきり顰めさせて言ってきた。

「その納豆や。何でそんなん食ってるねん」

「って身体にええもん」

白いプラスチックの中のものにたれと芥子を入れたうえでそのうえで箸でかき混ぜている。納豆の食べ方としては極めて基本である。

「美味しいし」

「そんなもん美味しい筈があるかい」

父はそれを頭から完全否定した。

「納豆なんてな。人間の食い物やない」

「皆食ってるで」

「御前のクラスの奴全員か」

「今時皆そうやる？」

少しきよとんとした顔で告げてきた。

「納豆なんて。皆食うやろ」

「じゃあその皆がおかしいんや」

むつとしながら鮭の焼いたものの皮を取っていた。なお妻の千賀子は二人の間、丁度テレビが正面に見える位置に座って黙々と御飯を食べている。

「それやったらな」

「皆がおかしいってそれ暴論やろ」

「暴論ちやうわ」

殆ど子供の口喧嘩である。

「納豆食うなんてな。腐って糸引いてる豆食うなんてな」

「これ発酵やし」

息子の方が正論であった。

「腐ってるんちやうで」

「腐ってるに決まってるやろが」

しかし健吾は息子の話を聞こうとしない。

「糸引いてて何処が腐ってないんや」

「だからこれ発酵や」

淳はあくまで正論を主張する。

「ヨーグルトと一緒にやで」

「ヨーグルトとかい」

「そや。父ちゃんヨーグルト好きやろが」

実は彼はヨーグルトが好物だったりする。それも毎朝食べる程だ。

第三章

「それやったら同じやろが」

「同じなわけあるか。とにかくわしの前でそんなもん食うな」

「食うな言われてももう混ぜてるし」

「食うんか」

「そや、食う」

淳も淳で頑固である。

「今からな。食うで」

「何度も言うからわしの前で食うな」

健吾も引かない。あくまで。

「断じてな」

「ほなお父さん」

「ここでやつと千賀子が口を開くのだった。

「それやったら一時退室でどないや？」

「こいつがか」

「いや、お父さんが」

しかし彼女はここで夫より我が子を選んだのだった。

「一時退室。どないや？」

「えっ、わしが？」

「だって私も今から納豆食うから」

「こつ言うのである。言いながら実際にパックを手を取ってそれを

食べはじめる。

「だからや。ちょっと部屋出といて」

「母ちゃんも納豆なんか食うんかいな」

「それ最初から言ってるやん」

夫への返答はしれっとしたものだ。た。

「広島では普通やって」

「わからん」

孤立無援になつた健吾は首を捻り回して言うしかなかった。

「そんなもん食うなんてな」

しかし今はどうしようもなかった。二対一ではどうしようもない。彼は一時部屋を去るしかなかった。そうして自分の部屋で本を少し読んでから二人が納豆を食べ終わるのを待った。彼にとっては実に忌々しいことであつた。

そんな納豆嫌いの彼だつたが勿論納豆を食べなくても生きていられる。というわけにはいかなかったのだつた。

何と彼は突然病氣になつてしまった。原因も何もわからないとんでもない奇病で急に寝たきりになつた。身体が動かず衰弱する一方だつた。

「何やこの病氣は」

彼は病室で仰向けに寝かされたまま言うのだった。

「いきなり身体が動かんようになって。何なんや」

「それがお医者さんにもわからへんらしいわ」

「原因不明らしいで」

千賀子と淳が枕元で彼に答える。

「それで治療法も」

「全然わからへんから」

「じゃあこのまま死ぬんかいな」

結論がここで出てしまつた。

「それやつたらな」

「ああ、それですが」

しかしここで部屋に入って来たお医者さんが言つてきたのだった。

「今治療法が見つかりました」

「えっ、今ですか？」

「はい、運がいいことに」

彼はにこりと笑つて健吾に述べるのだった。

「今見つかったんですよ、これが」

「お父さんよかつたじゃない」

「これで助かるで」

千賀子と淳もそれを聞いてほっとした顔で微笑んでいた。

「じゃあ早速その治療法で」

「なおそうな。それで」

「そやな。わし助かるんやな」

健吾もそれを聞いてまずは微笑む。

「よかつたわ」

「それで先生」

千賀子は満面の笑みですぐにお医者さんに尋ねた。

「その治療法って何なんですか？」

「薬ですか？それとも温泉か何かですか？」

淳も尋ねる。しかしここでお医者さんが言った治療法は何とも奇想天外なものであった。

「納豆です」

彼はまず一言で言った。

「それです」

「納豆!？」

「それがですか!？」

「はい、そうです」

やはりこう答えるのだった。

第四章

「それを食べればすぐになおります」

「一体どういふ病気なのかしら、本当に」

「だよ」

千賀子と淳は顔を見合わせて言い合う。とりあえず全くもって奇妙な病気であるということだけはわかるがそれでも納得することはできなかった。

「まあそれでもよ」

「だよ。治療法がわかつたし」

二人はそのことにまずはほっとした。これで健吾は助かると思ったからだ。

ところがであった。当の健吾は。今残されている力の限り大声を出してそれを拒むのだった。

「冗談やないで、そんなん」

「けれど納豆食べたらなおるんですよ」

「納豆みたいなもん食えるかいっ」

お医者さんの言葉にも従おうとしない。

「そんなもん。食うたら死んでまうわ」

「食べたら助かるんですよ」

お医者さんはあくまで抵抗する彼に対して冷静に告げる。

「納豆を食べたら」

「それでも食うてたまるかい」

彼は従おうとしない。

「そんなもん食う位ならこのまま死んでまうわ」

「困りましたね。御主人納豆が嫌いなんですか」

「はい、実は」

千賀子が申し訳なさそうにお医者さんに答える。

「生粋の関西人で。とにかく納豆だけは駄目でして」

「今頃珍しい人ですなあ、それは」

お医者さんも言葉のニュアンスからどうやら関西人らしいがそれでも首を傾げずにはいられないようであった。

「納豆を食べられない関西人なんて」

「主人の世代がそうだったらしくて」

「しかしそうも言つてはいられないんですよ」

お医者さんの言葉はここでも冷静であった。

「本当に食べないと死んでしまふんですよ」

「どうしてもですか」

「そうですね、納豆しかありません」

治療法はということであった。

「あの糸を引いた納豆であればそれで」

「じゃあどうしましょうか」

「まあこういう場合はです」

お医者さんは特に焦らずに言うのだった。

「やり方がありますから」

「あるんですか」

「こういう患者さんも多いんで」

薬を飲むことを嫌う患者ということであるらしい。

「任せて下さい」

「わかりました。それじゃあ」

「御願います」

「何があつても食わんからな」

その話の横で健吾は相変わらずの態度であった。

「死んでもな。このまま死んだるわ」

しかしお医者さんは特に困った顔を見せてはいなかった。冷静にその場を後にしてそのうえでこの時はそのまま部屋を後にした。そして暫くして昼食を持って来た。それはサンドイッチであった。

「諦めたんやな」

健吾はそのサンドイッチを見てまずは微笑んで言った。

「そや、わしは何があつても納豆だけは食わへんからな」

「あの、サンドイッチはこの人の好物ですけれど」

「けれどこれは」

「大丈夫ですよ」

お医者さんは微笑んで千賀子と淳に答えるのだった。

「御安心下さい」

「御安心下さいって」

「納豆じゃないのに」

「ですから御安心下さい」

お医者さんの笑みは二人の不安な言葉を聞いても変わらなかった。

「御覧になられていればわかりますから」

「そうなんですか。それじゃあ」

「それで任せますけれど」

二人はここではお医者さんに任せることにした。そうして様子を見守ることにした。健吾はまずはそのサンドイッチを受け取ってすぐに食べはじめた。食べるのは瞬く間でそのうえで言うのだった。

第五章

「何か変わった具でしたね」

「サンドイッチの中身ですか」

「最初はシーチキンかと思ったたら別のも入っていて」

そのサンドイッチの味を思い出しながら告げるのだった。

「ツナサンドでもないし。これって一体」

「何だと思えますか？」

「さあ」

言われても首を捻る。ベッドの中で首を捻るだけだった。

「何ですか、あれは。淡泊な味で食べやすかったですけれど」

「歯ざわりは」

「悪くないですね」

実際に歯ざわりについても悪く感じなかったのだった。

「柔らかくて。細かく刻んでましたけれどね」

「そうですね。悪くなかったですか」

「シーチキンの中に入れて匂いはそんなに感じなかったですけれど微妙な匂いも感じたような気がして。一体何だったんですか、これって」

「御知りになりたいですか？」

お医者さんは思わせぶりに笑って彼に問うのだった。

「何か」

「はい」

何が何かわからないままお医者さんの言葉に頷く健吾だった。

「何ですか？これって」

「はい、驚かないで聞いて下さい」

「ええ」

「納豆です」

彼が言う言葉はとんでもないものだった。

「納豆です、これは」

「はい!？」

話を聞いた健吾はまずは何が何かわからなかった。

「今何と」

「ですから納豆です」

彼はまた答えるのだった。

「納豆です、中に入れたのは」

「そんな訳ないじゃないですか」

しかし健吾はその話を信じようとしなかった。

「納豆があんなに美味しい筈がありません」

「けれど納豆なんですよ」

「あんなに淡泊でそれで優しい味の筈がないじゃないですか」

味覚はすっかりしていた。だから納豆の味もはつきりと認識できていた。

「歯ざわりだって。あんな味じゃ」

「ですが納豆です」

お医者さんの言葉は変わらない。

「私がサンドイッチに入れていたのは紛れもなく納豆です」

「まさか。あれが」

「驚かれましたか？」

「納豆はあんな味だったのですか」

普段のあの暴れんばかりの納豆嫌いが穏やかなのはやはり命さえ危ぶまれている状況だからだ。そしてそれだけでなく納豆の味に少し呆然となっているのだ。

「あんな穏やかで食べやすい」

「意外ですよ」

「ええ、意外なんてものじゃありません」

健吾の言葉は素直なものになっていた。

「そうですね。あれが納豆の」

「何度も言いますが納豆を食べれば助かります」

お医者さんはここでまた健吾に言ってきた。

「食べられますか？」

「そうですね」

健吾は少し呼吸を置いた。そうしてそのうえで答えるのだった。

「いただきます」

「左様ですか」

「食べてみるとまんざらではないものですな」

「だからそれずっと言ってるやん」

「美味しいって」

ここで妻子が声を合わせて彼にまた言ってきた。

「納豆は美味しいって」

「言ってるやろ？」

「そやな」

健吾も遂に頷いた。ベッドの中で声だけであつたが。

「美味いわ。じゃあそれ食べてや」

「うん」

「どないするんや？」

「生きたるわ。美味いもん食ってな」

これが彼の決断の言葉だった。こうして彼は大嫌いだった納豆を美味いと言つて食べて助かったのだった。結局のところ食わず嫌いでしかなく食べてしまえばどうということはないのだった。これは何も納豆だけに限ったことではないのかも知れないが。

納豆ジエネレーション 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5710h/>

納豆ジェネレーション

2010年10月8日15時31分発行